

専門語から一般語へと ——積極・消極を中心に

王 麗娟

1. はじめに

漢語はもともと中国のもので、四世紀末かいつか日本に伝わってきて以来、日本は自分の文字が徐々に持ってくるようになった。幕末・明治期、漢語が一層増加し、日本語に深く浸透した。この状況が日清戦争まで続いてきたが、日清戦争で清政府が敗北したため、文化、技術などいろいろな方面まで日本に学びはじめたとともに、たくさんの新語も日本から、中国へと逆輸入になった。中国の語彙に大きな変化をもたらしたことはよく知られている。例えば、

乙太 脳筋 脳蒂 中心 起點 現象 政事 商業上 手續 目的 規則 場合 但書 成立 取消 經濟 積極 消極 有機 無機 民主 野蠻 思想 組織 團體 國魂 膨脹 舞臺 代表 報告 困難 配當 觀念 犠牲 影響 機關 衝突 運動 家族 革命 抵力 壓力 自由 平等 共產 競争 權利 革命軍 地方 分權 精神 勢力 圈中 心點 方針 歡迎會 預備 科學界 維新 進歩 過度 改良 個人 腐敗 全體 料理 支那 大劇場 同胞 直接 間接¹

このような新名詞、新概念が大量に流入し、近代中国に徐々に受容された。上で掲載された諸例は源から考えれば、中国語から出自したもので、日本に新しい意味を付与された語もあれば、独立創ったものもある。「積極」「消極」は後者に属するものである。つまり、この二つの言葉はいわゆる字音語である²。ただ、ここで一つ疑問を持っている。「積極」が今日では、「自分から進んで、対象に働きかけようとする。物事に肯定的で、意欲的、進んでいること」、「消極」は「自分から進んで、対象に働きかけようとしないこと。物事に否定的で、内にとじこもりがちなこと」。新明解国語辞典（第五版）には、「積極・消極」の意味がしっかりつけてあり、品詞がはっきり言わない。「積極的・消極的」という結合形式が「形容動詞」に入っている。「電気」領域の意味も持っている。意味ベクトルで不思議だと思う。それで、本文では、「積極」、「消極」のような和製漢語は電気用語から一般語へとどのように起こったか、どのような姿で

¹沈国威.新名词与辛亥革命时期之中国·以来自日本的影响为中心.東アジア文化交渉研究別冊.2012 (8) :195-206 頁

²陳力衛 (2001:5) は、日本漢語を字音語、字訓語に分け、字音語を細分し、下位分類では純漢語、変容漢語、和製漢語である。

中国に、伝わったのかなどの問題を解明に努める。

2. 「積極・消極」についての考察

「積極・消極」が蘭学時代蘭学者により創られた和製漢語で、しかも物理用語で、後に、術語から引っ込み、一般語へと少しずつ変遷した。本節では、日本における「積極・消極」の用法が詳細に考察した。

2.1 専門語としての「積極・消極」

自然科学で使われる翻訳語は簡単に生み出されたわけではない。「洋書の如きは義理精緻に文義極めて深く、論説も亦頗る幽邃なり。字句の間、丁寧反覆、學術精鍊のものとも雖も、猶ほ其の訳に難ず。況や余は浅劣にして文に媚はず、安んぞ鳩摩羅什が人をして嘔噦せしむるの誹を免ることを得ん」とある（広瀬元恭『理学提要』題言、1856）。西洋の科学書に記されている内容は精密で奥深く、學術に卓越したのも、其の翻訳は大変である。ましてや、浅学の訳者にとっては、サンスクリットの經典を中国語に翻訳した鳩摩羅什が立ち現れ、まるで嘔吐させられるように無理やり訳語を生み出しているようであるという。

「積極・消極」はそうである。それを蘭学時代、洋学時代という特定の歴史背景の中において考察する。

『時代別国語辞典』を調査し、少なくとも、江戸までは「積極・消極」に関する用例が見出されない。今の段階では「積極・消極」を表す比較的早い用例は1837年の『舍密開宗』である。

蘭学時代では、「電気の陰陽極」自然現象を表す「消極・積極」で「陰極・陽極」の概念を表している。

- (1) 按ニ銀錢ヨリ起ル機カヲ消極涅瓦知弗（ネガチフ）オントケンネンデ、ポール ト名ケ
亞鉛ヨリ起ル機カヲ積極 剥斯知弗（ポスチフ）ステルリス、ポール ト名ク。（『舍密開宗』1837 卷二 二十二上）

また、続いて、後に「消極は－を記号とす舌に触て亜爾加里ノ味アリ紫崧汁ヲ绿色ニ變ス」「積極ハ十ヲ記号トス酸味アリ紫崧汁ヲ红色ニ變シ其光鮮明ニ形束針ノ如ク視神ニ触テ青火ヲ視。」と記している。ここから少なくとも、『舍密開宗』において、消極・積極は科学領域の概念を担っていると判断できる。その陰極・陽極の符号も付いている。

『舍密開宗』は音訳で消極、積極を注釈した。涅瓦知弗（ネガチフ）がオランダ語の「negatief」に相当し、オントケンネンデ ポールが *ontkennenpole* にあたる。剥斯知弗（ポスチフ）がオランダ語の「positief」に相当する。残念ながら、ステルリスの原語が見つからなかった。しかし、文脈から考えれば、ステルリス ポールがオントケンネンデ ポール (*ontkennenpole*) の対義語としての存在である。それで、*ontkennen* と同じ品詞で、動詞だと推測する。蘭学者の宇多川

榕庵が訳語を選択したとき、直訳で漢字「積」（積み重ねる意味）をステルリスに、「消」（消える意味）を *ontkennen* に対訳した。「積極」「消極」において、語構造がもちろん同じ V+N 形式の修飾関係になる名詞である。

- (2) 玻璃ト封蠟トニ發スル越歴其質各異因之分二種即チ玻璃ヲ摩擦シテ發スルモノヲ玻璃質越歴ト云ヒ又積極ノ發越ト名ク積極トハ積シテ其定量ニ過ルモノニシテ増越歴ノ義ナリ又封蠟ヲ摩擦シテ發スルモノヲ樹脂質越歴ト云ヒ 又消極ノ發越ト名ク消極トハ減シテ其定量不足スルオノニテ減越歴ノ義ナリ（『物理階梯』和歌山県 1874 巻下 4 下）

物理用語としての「積極・消極」が明治初期でも活躍していた。

2.2 術語から一般語へと変わりつつある「積極・消極」

明治維新後、教育の改革と普及に従い、物理学に関する入門書、教科書などが必要になり、主に欧米からの訳書で、それ以外、漢訳洋書も日本に伝わった。例えば、『博物新編』『智環啓蒙塾課初歩』『格物入門』『格物探原』などのような漢訳洋書を導入された³。

蘭学者が創った電気領域の「積極・消極」は明治初期で、中国の漢訳洋書における「陽極・陰極」と競合した。

- (3) 「二氣之所聚是也、蓋二氣名分陰陽、陽氣聚於陽極、陰氣聚於陰極、欲令隔斷不通、則電氣不能放出矣、須以引電之物、使由此極達於彼極、則電有路而氣可達矣」（『格物入門・電学入門』5 上）

上の例では、中国からの漢訳洋書『格物入門』における「陰極・陽極」は明らかに電気領域の概念を表すことが分かる。マーティンの書いた『格物入門』（1868 年）が出版された翌年の 1869 年日本に伝わってきた⁴。「陰極」「陽極」も日本に広汎に借用された。

- (4) 又試二（ア）器ヲシテ陰性電気ヲ起サシムルトキハ（イ）器ノ右端ハ陽極ト成リ左端ハ陰極ト成ル（『物理全志』1875 巻八 36 上）

明治八年出版された宇多川準一『物理全志』が凡例で「訳語ノ字面ハ多ク博物新編格物入門等二據リ物性ノ稱謂ハ物理階梯二従フト雖トキ間又新二訳字ヲ填ル者アリ其妥当ナラザル如キハ博雅ノ釐正ヲ俟ツ」と書いてある。幕末明治初期中国からの漢訳洋書が後世に訳名の選択に影響を与えた証となった。

- (5) 越列機（エレキ）消極體積極體第七章。瓦爾華尼機（ガルハニ）ヲ以テ物体ヲ分離シ、

³王氷.中外物理交流史.湖南:湖南教育出版社,2001:174-174 頁

⁴杉本つとむ.近代日本語の成立と発展.東京:八坂書房,1998:308 頁

此時積極ノタメニ分離サルル者ハ、消極體ニシテ、一ノ符号ヲ用ヒ、消極ノタメニ分離サルル者ハ積極體ニ一ノ符号ヲ用ユ。(『舍密局必携前篇』1862 上巻 10 下)

- (6) 絹布ニテ摩擦シテ玻璃棍ニ發見セル電氣ヲ積極電氣ト名ケ毛布ニテ摩擦シテ封蠟上ニ發見スル電氣ヲ消極電氣ト唱フ (『学校用物理書』1878 下 26 下)
- (7) 異種ノ電氣ノ發起スルヲ知ル、而シテ玻璃ニ發スルモノヲ陽性或ハ積極電氣ト曰ヒ、樹脂ニ起ルモノヲ陰性或ハ消極電氣ト曰フ (『改正物理小誌』1881 下 p17)

飯盛挺造の『物理学』(1884 年)において、「消極電流」「積極電流」、「陰極性」「積極性」という「積極」「消極」に関する用語もあった。

上の例文においての「積極體・消極體」「積極電氣・消極電氣」「積極性・消極性」「積極電流・消極電流」がいずれも「消極・積極」が結合成分としての存在である。ここから、幕末、明治期では、少なくとも、「消極・積極」が蘭学時代の物理術語から少しずつ変化する動きが見られる。

- (8) 故ニ先ヅ内地旅行ヲ行ツテ利ノアル方ヲ積極「ポジチウ」ト見、害ノ方ヲ消極「ネガチウ」ト見ルデゴザル(西周「内地旅行」1874『明六雑誌』二十三号)
- (9) 今日の有様を以て事の本位と定め、之より進むものを積極と為し、之より退くものを消極と為し(福沢諭吉『旧藩情』1877)
- (10) 仮に養生の法を二種に分ち、身を護るを消極の法と為し、外物を犯して其刺衝に慣るるを積極の法とすれば(福沢諭吉『通俗民権論』六 1877)

例(8)から(10)までの諸例はいずれも明治初期の先学たちが「積極・消極」に新しい意味を付与した。

蘭学時代物理用語の「積極・消極」が明治から中国語の「陽極・陰極」と交替している。同時に、「積極・消極」が別の意味にも変更しつつあるようになった。

2.3 一般語になった「積極・消極」

明治初期は西洋知識の導入に従い、語彙が急速に膨脹した時代である。田中(2010)によると、1874年から1887年にかけて大きく増加したという。多大な変化の中で、術語から一般語に変わったという類型もある。「積極・消極」がそのタイプのものである。意味合いの変遷、形態変化も時代に伴い、変化する。

紀元前6世紀のギリシアの詩人テオグニスは、「地上の人の世に生まれず、きらめく日の光を見ず、それこそすべてに勝りてよきことなり。されど、生まれしからにはいち早く死の神の門に至るが次善なり……」と歌っている。善と悪、光と闇という二つの実在を極端に対立させる二元論信仰は、必然的にペシミズムに導かれる。近代において、ペシミズムの哲学を説いたのはショーペンハウアーで、彼によれば、世界は不合理で、盲目的意志が支配している。人生は

苦であり、これからの解脱は、ただ、快樂追求のむなしさを悟り、無欲求の状態、すなわち、全き意志否定によって、現象世界が無に帰するニルバーナ（涅槃）の境地に達することによってだけ可能であるというのである。

明治初期の日本はそのような「悲観、厭世」西洋哲学の影響を受け、西周『哲学関係片断』において、楽、悦、歓を喜と称し、「喜」の隣に「積極」と書いて、それは積極的な心理活動だと指摘した。愁、惆、悵を憂という。それを消極心理活動だと指摘した。

『明六雑誌』が明治初期文化知識人らにより、編集された雑誌で、17号には「蓋シ智ノ發シテ材トナル善ナルハ睿聖明穎敏聰慧等ノ如キ惡ナルハ狡猾桀黠姦佞詭譎等ノ如キ是ナリル然ルニ是皆積極ニ属スル者ナリ其消極ニ属スル者ハ愚不肖頑鈍痴呆蠢等ノ目アリ」という文があった。考えてみると、ここでの「積極」が「肯定的、プラス」の意味合いで、「消極」が「否定的、マイナス」の意味合いを含んでいる。

上から西周の「消極・積極」が心理活動、喜怒哀楽に関わる意味合いだと分かるようになる。

(11) 德行ノ積極指導 東京日々新聞教育叢書第2編 德育ノ要目普及舎出版 明治18年6月

「積極指導」という臨時四字語において、「指導」が動詞で、「德行ノ指導」、積極が明らかに指導を修飾する働きである。しかも、「指導」という動作を進んでやる状態を「積極」で修飾された。

以上の内容は幕末から明治にかけて「積極・消極」の文中機能と形態の変化が窺えるようになった。

「積極・消極」が明治20年代から品詞が徐々に変わりつつ、「積極的・消極的」の言い方も出てきた。例えば、

(12) 然れども是れ特に消極的の快樂にして、積極的の快樂にあらざるなり（末広鉄腸『雪中梅』1886）

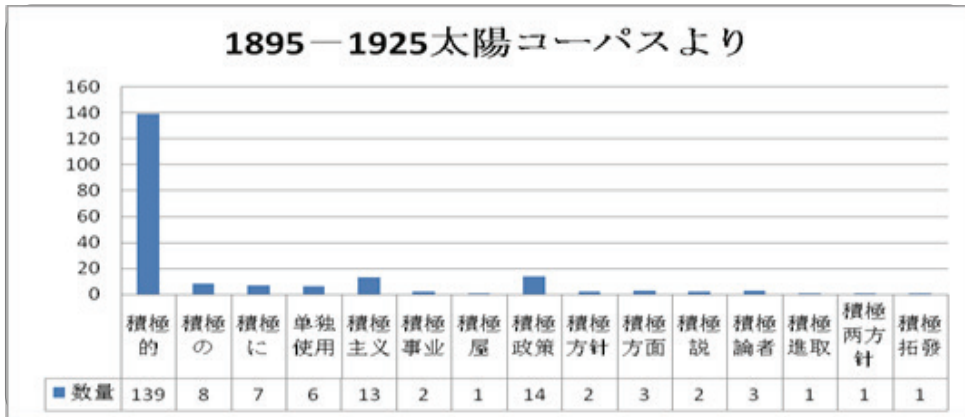
(13) 人は何事にまれ常に積極的に意力、智力、及び情熱を用いて一生を送りたいと（国木田独歩『夫婦』1904）

(14) 積極的な考と消極的な考とがごたごたと混合して（田山花袋『田舎教師』1909）

「積極・消極」が1880年代から「積極的・消極的」に変わりつつ、例文(12)において、「積極的・消極的」という形容動詞用法が出てきて、その後、「積極的・消極的」が形容動詞になった。明治20年代から意味が少しずつ変わり、「積極」が「樂觀」へと、「消極」が「悲観、厭世」へと近づいていく。

太陽コーパスにより、明治末期から大正までの「積極」の使い分けを次のようになる。

表 1



1895-1925の間、「太陽コーパス」における「積極」は形態上の変化が明らかである。そして、物理用語としての「積極」を含む用例は見つからなかった。表1から「積極」が明治後期に至って、すでに一般語に変わったことが明らかに分かる。

2.4 辞書類における記述

辞書類において、「積極・消極」の形態、意味記述の変化を考察する。此处では、「消極」を取り出し、説明する。

『英和对訳袖珍辞書・1862』(a) 極リタル、片意地ナル；

『附音図解英和字彙・1873』a.一定ノ、確實ナル；n.確實ナル、正面。negative pole；

『化学対訳辞書・1874』negative；『新編小学読本中等科学字引・明治17』陰ノエレキ；

『和英語林集成（三版）・1886』the negative electric or magnetic pole；

『漢英対照いろは辞典・1888』陰極（電気に云ふ所）。Negative pole；

『言海・1891』積極ノ条ヲ見ヨ→積極せききよく 電気ニイフ語、コレニ反対スルヲ消極トイフ、陰陽トイハムガ如シ；

『日本大辞書・1893』積極参考→積極 電気ノ語、陽ノ義、之ニ対シテ陰ヲせうきよく（消極）トイフ；

『和英大字典・1893』（physics）the negative pole(of electricity)；

『ことばの泉・1898』しやくきよく その陰性なるを 消極といふ；

『新式以呂波引節用辞典・1905』電気の陰性なるもの；

『法律経済熟語辞典・1908』否定、不為、不有、不成立、不存在等、総て陰的の状況を形容する用語なり、(例解) 日米間に戦争起るや否やとの間に対し否など答ふるは消極的答案なり。

『新式辞典・1912』為さぬこと、ないこと、否定、拒否、陰、裏の義をあらはす語（積極の対）

消極的。

「消極的・積極的」が辞書に載せるのは早くも『日本大辞典・明治 26 年』からであると推測した。

上の辞書を通じ、「消極」の意味・形態変化が一目瞭然になる。大正になると、物理用語としての「消極・積極」の意味用法が無くなり、「無限、否定」「肯定」の意味に移った。

蘭学時代から用いられた「positive pole」が直訳で「積+極」、「negative pole」が「消+極」に対等させ、明治に至って、「積」と「陽」、「消」と「陰」が交替し使用された。いずれも物理術語としての用法であるが、明治 10 年代から、直訳から義訳に変わり、「積極(的)」「消極(的)」が「positive」「negative」に相当するようになった。

「積極・消極」が蘭学時代における術語、しかも名詞として使われた用語から 1880 年代に至って、一般語、しかも形容動詞に変わる過程が明治期を通り、完成され、大正時代になると、術語としての意味が消え、一般語化された。

3. 中国への導入

19 世紀末から 20 世紀初頭までの 20 数年間は中国社会の近代的転換期である。中国の思想・文化が伝統的なものから近代的なものに変わり、新知識、新概念の導入がそれを担う語彙に反映する。「積極・消極」がそのとき中国に導入された。

電気学に関する電池の両端を「陰極・積極」で表し、日本の蘭学時代作られた「消極・積極」を明治期産出された新意味の姿で中国に導入された。

梁啓超が編集長として編集された『清議報』は 1898 年 12 月 23 日日本の横浜で創刊した。

(15) 何谓各国公同方针，曰保持己国权利利益，有机会则扩张之，是也。而为之或以积极处
置为要，又或以消极处置为要，故外交家，伸缩难测，变化靡常。（外汇论 清議報 1899
年 7 月 8 日）

『新議報』から出てきた「積極・消極」は術語の意味がすでに無くなり、新義を使った。

彼の作品の中で進んで日本からの新語を使用した。『梁啓超文集・東南大学課卒告别辞』において、「不过说青年时代应用的，现代所适用的，我认为采积极的方法较好，就是先立定美满的人生观，然后应用之以处世」という文句がある。中には「積極、消極」という和製漢語を積極的に使用した。

中国『申報』で、梁氏以外に、早い用例を見つけられた。

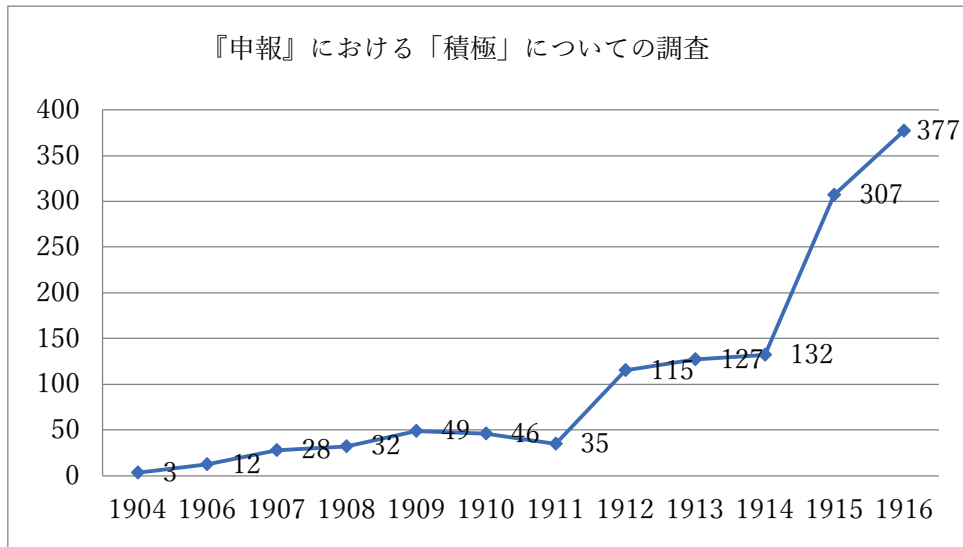
(16) 製造均納諸研究範圍之内辦法益啓生利之原本應消極積極並加經營惟勞動者之智職未開
社會中之資費尚絀現今能力所逮祇得注重消極一途至積極之經營惟於紬理的稍多實力的執
行不能不暫緩本欄規則（申報 1904 年 5 月 13 日清光緒三十年三月二十八日）

(17) 吾不知其所持論理果何在也爲負氣之言則曰吾寧國亡耳而不肯忍吾所辱以求學此種思想吾無以名之強取譬焉則猶與庖人賭氣而我不食也何損於庖人徒自取餓葷耳論者或曰吾之歸國非消極的政策而積極的政策也（申報 1906 年 1 月 17 日清光緒三十一年）

例 (16) (17) が中国清朝で創刊された『申報』からの用例で、20 世紀初期において、「積極的」「消極的」が中国にも広がるようになった。

次は『申報』において「積極」が中国に導入されえ、使用実態を調査し、次のグラフになる。

表 2



1911 年以外に、「積極」の使用状況は上昇していることが分かる。

『申報』では「積極的政策」「積極的方法」「積極的協助」「積極者」「積極的進取」「積極的」「積極政策」「積極進行」「積極主義」「積極行為」などの表現がたくさんあり、すでに中国語に溶け込んでいる

辞書類において、「積極・消極」いつ収録されたのか、どのような姿で収録されたのか考察する。

- 顔惠慶英華大辞典 (1908) には、物理用語としての「積極・消極」があるのに対して、心理活動の「積極的・消極的」もある。
- 辞源 (1915) には「積極」について、つぎのように定義つけされた。「凡行為力图進取者。謂之積極。反是謂之消極。如理財務開源者爲積極。務節流者爲消極。如衛生…磁石電気之正号負号亦有積極消極之称」
- 官話 (1916) には物理用語の「積極・消極」は収録されていないが、心理状態の姿で収録されていた。

上では新聞類、書籍類、辞書類において、中国に導入された「積極・消極」の実態を詳しく考察した。物理用語の「積極・消極」が中国の「陽極・陰極」と競合し、借用されていなかったのに対し、心理状態用法は中国に積極的に借用された。

4. おわりに

蘭学時代に蘭学者らが創った「positive pole」「negative pole」対訳語「積極」「消極」が術語、しかも名詞として使われ、1870年代に至って、一般語、しかも形容動詞に変わりつつあるとともに、「積極的・消極的」という結合形式も出てきて、明治期を経て、大正時代になると、術語としての用語が消え、一般語化された。一方、日清戦争後、中国敗北したあと、日本に学んで、留学ブーム、翻訳ブームが高まる同時に、知識人、先学たちが次から次へと日本語を導入していた。「積極・消極」も「樂觀」「悲觀」「無限」など意味で中国に伝播され、中国語に溶け込むようになった。

参考文献

- 王氷. 中外物理交流史. 湖南: 湖南教育出版社, 2001: 174-174 頁
- 沈国威. 新名词与辛亥革命时期之中国-以来自日本的影响为中心. 東アジア文化交渉研究別冊. 2012 (8) : 195-206 頁
- 杉本つとむ. 近代日本語の成立と発展. 東京: 八坂書房, 1998: 308 頁
- 陳力衛. 和製漢語の形成とその展開. 東京: 汲古書院, 2001: 5 頁

『或問』投稿規定

- 投稿資格は、近代東西言語文化接触研究会会員（入会は内田、又は沈まで）。
- 投稿論文は、原則として未公開の完全原稿とし、電子テキストとプリントアウトの両方を提出する。原稿は返却しない。
- 執筆者による校正は、二校までとする。
- 投稿論文は、本誌掲載後、他の論文集等の出版物への投稿を妨げない。
- 原稿作成に当たって、『或問』「執筆要領」を厳守する。
- 原稿料は支払わないが、雑誌を格安価格で提供する。

『或問』執筆要領

1. 使用言語は、日本語、英語、中国語とする。
2. 字数は、16,000字（400字詰め原稿用紙40枚）までとする。
3. 簡単な要旨（原稿と異なる言語による）を付する。
4. 投稿は、所定のフォーマットを用い、表などは極力避ける。フォーマットは、沈国威までご連絡ください。
5. テンプレートを使用しない場合、テキストファイルの形で提出する。
6. 論文中に中国語などを混在させる場合、Windowsは、微軟Pinyin2.0（簡体字）、微軟新注音（繁体字）を用いること。
7. 注は、脚注を用い、文章の行中に（注1）のように番号を付ける。
8. 参考文献は、下記の体裁で脚注に付けるか、或いは文末に一括して明示すること。

（単行本）

或問太郎、『西学東漸の研究』、大阪：しずみ書房、2000年10-20頁

Bennett, Adrian A. *John Fryer: The Introduction of Western Science and Technology into Nineteenth-century China*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press 1967.

（論文）

或問花子、「東学西漸の研究」、『或問』第1号、2000年2-15頁

Fryer, John. "Scientific Terminology: Present Discrepancies and Means of Securing Uniformity." *Records of the General Conference of the Protestant Missionaries of China Held at Shanghai, May 7-20, 1890*, pp. 531-549.

9. 本文や注の中で、文献に言及するときには、或問太郎(2000:2-15)のように指示する。同一著者による同年の論著は、2000a、2000bのように区別する。

内田慶市 (u_keiichi@mac.com)

沈 国威 (shkky@kansai-u.ac.jp)